

# 釜石の歴史

よもやま話

10

釜石の鉄学編 (6)

問い合わせ  
市世界遺産課 ☎22-8846

## 釜石製鉄所の歴史 ②

### 釜石鉱山田中製鐵所の発足

明治16（1883）年正式に廃山が決定した釜石鉱山では10月に残務掛を置き、払い下げ業務が始まりました。鉄道は藤田伝三郎らが払い下げを受け、阪界鉄道（現南海鉄道）へ、鉱石などは浅野総一郎らが払い下げを受けました。静岡県出身で東京の商人の「鉄屋」田中長兵衛もこの払い下げに参加し、代理として横須賀支店長の横山久太郎が釜石に派遣されました。

横山は誰も払い下げを受けない木炭に目をつけ、明治17（1884）年3月に大量に購入しましたが、その頃は運送費が高い割に相場が安く、大損をしてしまいました。そこで、釜石に残っていた木炭と鉱石を使い、敷地千坪を借り受け、明治18（1885）年から製鉄をすることとしました。文献では、横山が進言して、とありますが、当時、長兵衛の息子安太郎（のちの2代目長兵衛）もドイツに留学していた大河平才蔵に学んだり、出雲地方への視察を行っていることから、社を挙げて製鉄に取り組もうとしていたようです。

官営製鉄所の技術者から高炉操業主任に高橋亦助、機械整備主任に村井源兵衛の地元出身者を雇い入れ、3トン程度の小高炉を建設し、操業に挑戦し

ました。フイゴが送る風を暖風にする熱風炉に改良したり、原料の配合比や送風量、炉内径の変更などの工夫を重ねましたが、数十回の失敗を繰り返しました。それでも諦めずさらなる改良・改善を加えて何回も挑戦しましたがうまくいかず、責任を問われた横山はついに明治19（1886）年4月、高橋の後を託して東京へ戻されます。残された高橋らはさらなる努力を重ね、明治19年10月16日、高炉吹入れ49回目で連続出鉄に成功しました。この成功を受け明治20（1887）年には官営時代の敷地や諸建物の払い下げを受け、釜石鉱山田中製鐵所を創業しました。



49回目にして出鉄に成功した高炉

### 釜石から八幡へ

田中製鐵所は明治24（1891）年までに小高炉を鈴子に4基、大橋に2

基建設し、さらに明治27（1894）年には栗橋分工場を操業開始。計7基の小高炉で操業しました。その間、釜石座鉄鉄は明治23（1890）年の大阪砲兵工廠の実験により、海岸砲の弾丸製造用の輸入鉄鉄であるイタリアのグレゴリーニ鉄に比べ遜色なしとの結果を得ました。またヨーロッパ最大の武器・砲弾製造元であるドイツのエッセンにあるフリードリッヒ・クルップ製のものと比較しても同等で、しかも安価との結果を得ます。

一方、官営時代の高炉2基は、廃業後そのままの状態でした。そこで、田中は農商務省技師で帝国大学採鉱冶金科教授の野呂景義とその弟子で農商務省技師試験であった香村小録にその改修を依頼し、明治27（1894）年、改修に成功しました。

改修した炉は25トン高炉から30トンになっただけでなく、日本で初めて木炭に代わってコークスを用いて製錬したことで出鉄量が飛躍的に増加しました。この年、釜石鉄の生産量が初めて中国地方の砂鉄鉄を超えました。

コークス高炉成功記念として、初の鉄鉄（初湯）で鍛造した山神社扁額（市指定文化財）は釜石製鐵所山神社（桜木町）の鳥居に掛けられています。「山神」の文字は香村が揮毫しています。

釜石での成功は官営八幡製鐵所建設のきっかけの一つとなり、初代技監には大島高任の長男道太郎がつき、明治

34（1901）年操業を開始します。当初はうまくいかなかったものの、嘱託顧問として野呂が指導し、日本最大にして日本初の鉄鋼一貫体制の製鉄所として本格始動します。なお、野呂の改修には釜石の技師と8名の熟練職工が派遣されています。釜石製鐵所も明治36（1903）年、民間初の鉄鋼一貫体制を確立します。

### 横山久太郎

横山は安政3（1856）年、遠江国山名郡久努村（現在の静岡県袋井市）で生まれました。江戸で山田孫次郎商店で奉公し、後に田中長兵衛の部下となり、さらに娘婿となりました。官営釜石製鐵所の払い下げを機に製鉄業を開始し、初代釜石製鐵所所長として活躍し、学校や病院などの施設建設や現在の県道釜石遠野線などの道路整備に尽力しました。また、三陸汽船（株）、釜石電灯（株）の設立など地域の発展にも多大に貢献しました。大正10（1921）年に没し、今年は没後100年にあたります。



横山久太郎

